

# 昌幸くんと尋ねる 三国街道エリア

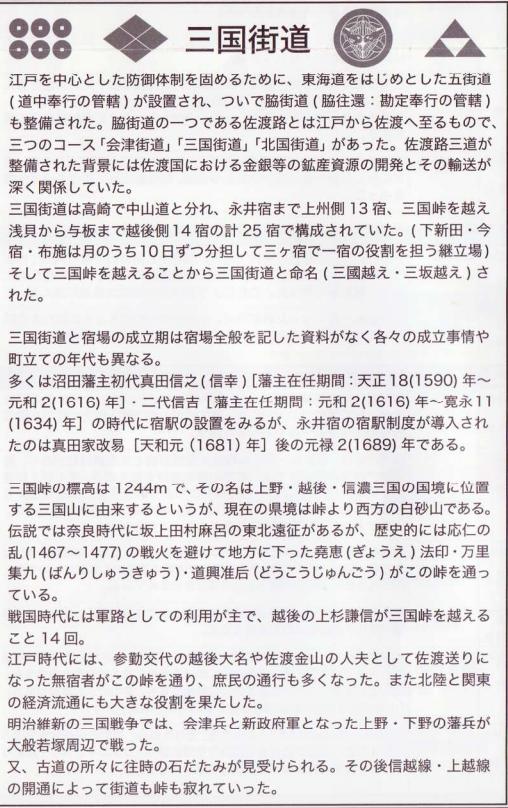
みなかみ町歴史マップ



吾妻耶山 △1322.7



## みなかみ町



## 三国街道

江戸を中心とした防御体制を固めるために、東海道をはじめとした五街道（道中奉行の管轄）が設置され、ついで脇街道（脇往還：勘定奉行の管轄）も整備された。脇街道の一つである佐渡路は江戸から佐渡へ至るもので、三つのコース「会津街道」「三国街道」「北国街道」があった。佐渡路三道が整備された背景には佐渡国における金銀等の鉱資源の開発とその輸送が深く関係していた。

三国街道は高崎で中山道と分れ、永井宿まで上州側13宿、三国峠を越え浅貝から与板まで越後側14宿の計25宿で構成されていた。（下新田・今宿・布施は月のうち10日ずつ分担して三ヶ宿で一宿の役割を担う維立場）そして三国峠を越えることから三国街道と命名（三国越え・三坂越え）された。

三国街道と宿場の成立期は宿場全般を記した資料がなく各々の成立事情や町立ての年代も異なる。

多くは沼田藩主初代真田信之（信幸）【藩主在任期間：天正18（1590）年～元和2（1616）年】・二代信吉【藩主在任期間：元和2（1616）年～寛永11（1634）年】の時代に宿駅の設置をみると、永井宿の宿駅制度が導入されたのは真田家改易【天和元（1681）年】後の元禄2（1689）年である。

三国峠の標高は1244mで、その名は上野・越後・信濃三国の国境に位置する三国山に由来するというが、現在の県境は峠より西方の白砂山である。伝説では奈良時代に坂上田村麻呂の東北遠征があるが、歴史的には応仁の乱（1467～1477）の戦火を避けて地方に下った義惠（ぎえい）法印・万里集九（ばんりしうきゅう）・道興准后（どうこうじゅんごう）がこの峠を通っている。

戦国時代には軍路としての利用が主で、越後の上杉謙信が三国峠を越えること14回。

江戸時代には、参勤交代の越後大名や佐渡金山の人夫として佐渡送りになった宿宿者がこの峠通り、庶民の通行も多くなった。また北陸と関東の経済交流にも大きな役割を果たした。

明治維新的三国戦争では、会津兵と新政府軍となった上野・下野の藩兵が大般若峠周辺で戦った。

又、古道の所々に往時の石だみが見受けられる。その後信越線・上越線の開通によって街道も峠も寂れていった。

中之条町

高山村